

## 要旨

本研究は、来館者に対する博物館の意識の変化を考察するため、常設展示全面改修を実施した都道府県立の歴史系博物館を対象とし、文献調査を通じて、常設展示における展示目的、展示内容、展示手法の変化傾向を考察した。文献調査では、調査対象となる博物館が公開する年報、研究紀要、報告書、学術論文を用いた。本研究は、歴史展示における博物館と来館者の関係性の全体像を把握することを目的とした博士論文に向けた、基礎データの整理と分析となる。さらに、博士論文において調査対象とすべき事例を選定するうえでの参考となることを期待している議論に取り組んだ。

第1章では、研究対象の具体的な抽出方法を説明した上で、本研究で研究対象となる博物館の常設展示の改修情報を整理し、展示目的・展示内容・展示手法の3つの項目に従って分類し、改修前後の変化を比較した。本稿では北海道博物館、秋田県立博物館、山形県立博物館、群馬県立歴史博物館、埼玉県立歴史と民俗の博物館、石川県立歴史博物館、福井県立博物館、三重県総合博物館、兵庫県立歴史博物館、高知県立歴史民俗資料館、沖縄県立博物館・美術館の11館を主要な調査対象とする。第2章では、第1章で整理した前後変化に基づき、各調査対象館の変化傾向を分析しながら、来館者の主体性を支援する歴史展示の出現と手法を確認した。また、その結果に基づき、来館者の展示における位置づけについて、博物館側の意識変化を考察した。

調査の結果、都道府県立歴史系博物館常設展示の主要な目的は、来館者に地域の歴史・文化を理解させることを改めて確認できた。一方、2000年代以降、展示を来館者と交流する場、あるいは来館者が主体的に活動する場として認識する博物館が現れていることも明らかにした。そのための取り組みとして、来館者と博物館職員が交流できる空間の設置が挙げられる。同時に、来館者を単一で固定的な集団として考えず、その多様性と主体性を重視するため、自由選択できる観覧動線と多層の展示情報を提供している館が現れたことも確認できた。ただし、来館者の「主体性」についての定義と範囲にばらつきが見られており、「交流」の意味は統一されておらず博物館によって様々な視点から捉えられている。

本稿では文献調査によって都道府県立歴史系博物館が考える主体的な学びを促す展示方法と、来館者に対する意識の変化を明らかにした。今後の課題として、博物館側の意識がどのように実現されているか、また、来館者にどのように受け止められているかをさらに調査する必要があると考える。